

「情報鎖国」の日本

——戦争を知らずに“戦争法”を造ってしまう——

「イラク戦争の反省を活かして・・・民主主義と立憲主義どうなるの？」と題する講演会(6/10)があり高遠菜穂子さんのお話を聞くことができました。

高遠さんはイラク戦争から13年だが「今が最悪の状況です」と2013年12月以降の地獄のようなイラクの現実を語りました。ラマディ、フアルージャでは、『IS』によって高遠さんの友人である弁護士が処刑され、そのISを攻撃するとしてイラク政府は、4～5年前に建てられた総合病院をも攻撃し、ボロボロの状態。イラクの多くの住民にとっては「カナトコとハンマーの間におかれている状況」と語りました。

ここまでイスラム教の宗派の対立になってしまったのは、私たちの始めたイラク戦争によってそれまでの“イラクの共存社会”がじわじわ壊され人間の心は変わっていき“帰属主義”から排外主義、ヘイトスピーチ、ヘイトクライムになってきたのが今の姿と説明しました。

イラク新政府がシーア派によってつくられる、新警察がシーア派によってつくられ、「反テロ法」によって“スンニ派狩り”が始まる。イラク政府はIS掃討の名のもと政府軍とシーア派民兵によってスンニ派を殺害していく。

“イラク政府の圧政地獄を開放する”と入ってきたISは1カ月程は住民をほっとさせるがその後IS原理以外の者を虐殺する恐怖政治になってくる。これがイラクの現実なのです。戦争とはこのようなものです。と高遠さんは現実を見ていただきたいと訴えました。

そして日本の国会で議論されていた安保法(戦争法)の議論を見ていると、あまりにもイラクの情報が入っていないことに大きな問題を感じたとのこと。なぜかイラク内での政府・シーア派・スンニ派・ISが入り乱れて虐殺し合う情報が全く日本に入っていない。

日本は「24時間の国際ニュースのチャンネル」が無い世界で唯一の国。“情報鎖国”の中での安保法制の審議

は何なのか?「戦場のリアリティのかけらもない中での戦争法案への質疑と答弁」中東の情報もない中で南スーダンの“駆けつけ警護”が語られる。戦場で使われる武器製造国を地元住民がいつも確認している現状も考えずに武器輸出を推進する日本政府。安倍首相は「武器使用を認めて集団的自衛権を行使しても自衛隊の危険は増えない」と言ってはばかり。高遠さんの話から、私たちが戦場の現実に目をつぶって法案審議をしていた状況が明らかになりました。

又、高遠さんは、「イラクの共存社会が夫婦間でも宗派对立になってしまったこの間の人間の心の変化をみると、自分自身の中にもそのようになってしまう可能性があるのではと思われた」と語りました。そして「なんでこんな状態にまでなって?」と言う日本人の方がそうなりやすいのではないかと指摘しました。

「こんな地獄になるまでなぜ止められないのか?「テロ対策」「対IS」と言われると世界中どこでも人権団体でもグーのねも出なくなる現実。虐殺の連鎖を解きほぐせなくなってしまう人間の行動様式とは・・・」と問題提起されました。

安保法は“戦争”と言う手段を是としてしまうもの。其の戦争とは首を切り落とすイラクの現実、子どもでも爆弾の犠牲に、女性は性奴隷として処分される、男は集められ虐殺される・・・それをするのは普通の人たちです。戦争は人を変えてしまう。高遠さんの話からもわかります。

安保法制を市民の力で廃止させましょう!



高遠菜穂子さんと